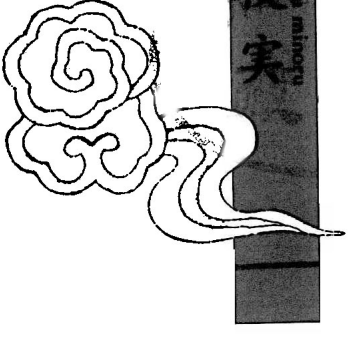
当世もののけ生態学

betsuyaku minoru
別役 実

当世もののけ生態学

別役実
bettyaku minoru



別役　実

1937年旧満州に生まれる。1960年早稲田大学政経学部中退。劇作家。1968年新劇岸田戯曲賞、1971年紀伊國屋演劇賞、1972年芸術選奨文部大臣新人賞、1988年芸術選奨文部大臣賞・読売文学賞を受賞。多数の戯曲や童話のほか、生物学、医学、犯罪学などを素材にした、洞察とユーモアに富むエッセイを手がける。近著に「はるなつあきふゆ」（三一書房）、「別役実の人体カタログ」（平凡社）、「教訓」（王国社）、「思いちがい辞典」（リブロポート）などがある。

〈検印廃止〉

当世もののけ生態学

一九九三年十月二十日　印刷
一九九三年十月三十一日　発行

著者　別役（べつやく）実（みのる）
発行者　早川浩
発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二―二
電話　東京　三三五二―三二一一（大代表）
振替　東京・六―四七七九九

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります
©1993 Minoru Betsuyaku
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-207816-2 C0095

当世もののけ生態学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

序　歩み寄る近代科学 ―― 9

一　妖怪ウオッチングの心得 ―― 感性を研ぎ澄ませ

ろくろっくび ―― 19

ざしきわらし ―― 27

つめかみは ―― 35

二　進化の徒花 ―― 環境に過剰に適応したもの

あずきあらい ―― 45

ねこまた ―― 53

かげろう ―― 61

三　高度な戦略——淘汰に勝ち抜くもの
のっぺらぼう　71
ひとつめこぞう　79
さとり　87
四　利己的行動——人間に寄生するもの
ふんべつ　97
これくらい　105
かいせん　113
五　いるような、いないような——擬態を使うもの
どろたぼう　123
じんめんじゅ　131
いちもくれん　139
うたかた　147

六　人間やめますか？――近づかないほうがよいもの
なみはぎ――157
てもちぶさた――165
こだまのあとだま――173
七　きしみあったり、押しつけあったり――対人関係のあわいに生息するもの
すなかけばば――183
どうも――191
あまんじゃく――199
八　夜のあいつは朝のそいつか？――管理情報化社会に生息するもの
あさぼらけ――209
まくらがえし――217

九　世界の熱いまなざし——経済界に生息するもの
もったい——227
ぎゃおす——235
十　IUCY(国際妖怪保護連盟)指定の天然記念物怪(もののけ)——保護が必要なもの
くだん——245
けうけげん——253
とりとめ——261
あとがき——269

本文イラスト——玉川秀彦
装幀——原　研哉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　歩み寄る近代科学

「近代科学」はこれまで一貫して、「妖怪変化」のたぐいを無視してきた。もちろんこのことは近代科学にはじまったことではない。孔子の『論語』の中に、「君子は怪力乱神を語らず」とあり、すでにそのころから「良識」そのものが妖怪変化のたぐいを無視しようとしていたことが知られている。むしろ近代科学は、良識の促すそうした遠く太古よりの圧力に、やむなく屈したのだとも言えよう。

良識は当初、錬金術であり魔術であり占星術でありその他の術であった諸科学をも、「いかがわしい」ものとして無視してきたのだが、それらが「近代科

学」と装いをあらためることにより、一転してこれを認めることにしたという歴史がある。そして近代科学が、錬金術であり魔術であり占星術でありその他の術であった時代には、明らかに妖怪変化のたぐいに親近感を抱きながら、良識の側にくみすることになって逆に、それらを無視し、攻撃する急先鋒となったいきさつも、これと無縁ではない。

このことはもしかしたら、我国でキリシタン・バテレンがまだ禁制であった時代、「隠れバテレン」をあばきだして白洲に引きずりだす急先鋒となったのが、ほかならぬ「転びバテレン」[1]であったこととよく似ている。近代科学は、かつての錬金術であり魔術であり占星術でありその他の術であることから、良識に認めてもらうために「転んだ」のであり、良識への忠誠を示すために、あえてかつてそれらがそうであった「いかがわしさ」の根源たる妖怪変化のたぐいを、率先して無視し、攻撃しなければならなかったのである。

もちろんこの時点での近代科学のとった態度を、一概に非難することはできない。それによって妖怪変化のたぐいが、以後の長く暗い苦難の時代を耐えな

---

(1) 「おてんば」というのは、「お転婆」と書き、「婆さんが転んだもの」と解するのが一般であるが、実は「バテレンが転んだもの」にほかならない。そして意とするところは、「裏切り者」ではなく、「機を見るに敏なる者」なのである。

ければならなかったとしても、そうすることで、近代科学がこの世界において一定の役割を果たすことになったのは否定できないことだからである。むしろ問題は、近代科学が妖怪変化のたぐいを単に「裏切った」ことではなく、にもかかわらずまだ「裏切りきっていない」と感じとっている点であり、さらに「裏切り続けなければならない」と考えていることであろう。つまり近代科学は、いまだにそうした「暗い過去」を引きずり、その意味で逆にそれらに呪縛されているのである。

近代科学者たちが、えてして湿気のない部屋に住みたがり、白衣を着たがり、眼鏡をかけ、鉛筆の先をとがらせ、[2] 数字と機械に取りかこまれたがったのは、恐らくそのせいである。そのようにして彼らは、妖怪変化のたぐいだけでなく、その気配とも無縁になろうとしたのであり、そのようにしてしか近代科学者たり得ないと考えたのであろう。もちろん、彼らのこうした性向は、近代科学そのものの内容をも規制した。つまり、反妖怪変化的であることのみを、近代科学の立場としたのである。

---

(2) 魔除けである。妖怪は、とんがったものに近寄らない。もしくは、妖怪はとんがったものに近寄らないと近代科学に信じられている。

そして今日に至り、あらためて振り返ってみると、かつて妖怪変化のたぐいがそうであった「いかがわしさ」と全く正反対に位置しながらも、同様のいかがわしさをほかならぬ近代科学が、そこはかとなく匂わせはじめていることに、我々は気づくのである。しかも、「試験管ベビー」や「遺伝子の組み換え」や「臓器移植」や、その他この種の匂いに接する機会が、ここへきて急激に増加しつつある。もし今日孔子が生きていたら、その『論語』に「君子は近代科学を語らず」と書くことになったであろう。つまり良識そのものが、いったんは自らの陣営に引きいれた近代科学に、眉をひそめはじめているのであり、もてあましはじめているのである。

これではいけない。このままこうした事態を放置しておくと、良識は、かつて近代科学の手を借りて妖怪変化のたぐいを排除したように、今また「転び近代科学」の手を借りて、当の近代科学を排除してしまいかねない。よしまたその転び近代科学に当たるものとして妖怪変化のたぐいが利用されることになったとしても、さほど事情は変わらない。妖怪変化は救われても近代科学は救わ

れないのであり、我々は依然として、「二つに一つ」の立場を強いられるのである。

問題は、妖怪変化と近代科学が常に「二つに一つ」であるという、その考え方そのものの中にある。何故、「妖怪変化か近代科学か」ではなく、「妖怪変化も近代科学も」であることができないのであろうか。恐らくそれは、近代科学と妖怪変化が別れるに当たって、それぞれがそれぞれの傾向を過剰に洗練させすぎたせいであろう。近代科学は、反妖怪変化的であろうと過剰に意識しすぎたのであり、一方、妖怪変化は、反近代科学的であろうと、これまた過剰に意識しすぎたのである。

しかし、その結果、近代科学は、かつて妖怪変化がそうであったと同様の「いかがわしさ」をその身近に匂わせるに至ったのであり、だとすれば今日、その「いかがわしさ」を通じて再び妖怪変化と融和するための、絶好の機会が訪れたと言えないであろうか。そうすることで我々は、近代科学と妖怪変化を、「二つに一つ」ではなく、「二つながら」同時に、良識の側に組み入れること

が可能になるのであり、ひいては「良識」と「いかがわしさ」がほとんど同じものであるという、[3] かつては思いもよらなかった立場を、我々のものとすることができるのである。

我々がここで、妖怪変化のたぐいを取り扱う立場というのは、ほぼこのようなものであると言えよう。近代科学がまださほどいかがわしくなかった時代であったら、さしずめ「妖怪変化のたぐいを、近代科学の光のもとにさらけだす」ということになったであろうが、ここでは同時に、「近代科学のたぐいを、妖怪変化の闇に包みこむ」のである。つまり妖怪変化のたぐいは、あまりに明晰に解明されすぎることによって、むしろ妖怪変化のたぐいであることをやめてしまうのであるが、その難を、近代科学の明晰さを混濁させることによって逃れようというわけである。

もちろんこうした立場は、妖怪変化の側が近代科学の側に歩み寄ったもの、とばかりは言えない。近代科学もまた、このように歩み寄ろうとしているのであり、彼らがここへきて、湿気のある不潔な部屋に住んだり、汚れた白衣を着

（3）良い薬には強い副作用があるように、良い「良識」には「いかがわしさ」がともなうのが常である。つまり、「いかがわしさ」は「良識」の副作用と言えよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com